

実践報告3 メディア教育開発センターの実践

大塚 雄 作（メディア教育開発センター・教授）

メディア教育開発センターの大塚です。どうぞよろしくお願いいたします。

「メディア教育開発センターの実践」ということでお話しいたしますが、まずは、皆さんにお聞きしたいと思います。

メディア教育開発センターというのはどういう所か知らない方、ちょっと手を挙げてみていただけますでしょうか？

だいたい、47人くらいの方が、今、手を挙げられました。（笑）こうやっていい加減に数を言うのも、授業の1つのテクニックなんですね。手を挙げていただくのも、私もあまり話が面白くないものですから、そういうことで眠気覚ましをしていただくというテクニックでありまして…。

それはさておき、メディア教育開発センターというものから説明しなければならないだろうと思います。このOHPは、だいたいこの辺を今しゃべっているぞというのを知らせる程度の目的で作っておりますので、皆さんの所に配布いたしましたプリントを御覧いただければ十分かと思います。メディア教育開発センターなどという所にいますと、メディアが使えて当たり前のように思われるのですが、私はまだパワーポイントを使ったことがありませんで、赤岡先生がパワーポイントとでうまくいっていると先ほどおっしゃられていましたが、そういうことを伺うとちょっとドキッとしたりいたします。でも、今日は進行の大山先生の方から、OHPとこのレーザーポインターしか用意してませんからと伺っていましたので、実は、ホッとしているんですけども、OHPも本当は視覚に訴える図なんかを用意してくればよかったんですが、プリントのテキストをコピーしただけという、ごくごく原始的なOHPで進めさせていただきます。

I メディア教育開発センター（NIME）の研修事業

メディア教育開発センターとは

さて、メディア教育開発センターですけれども、上にNIMEと記しましたが、これは英語名はNational Institute of Multimedia Educationのイニシャルをとったもので、「ニーメ」とか、人によっては「ナイム」と呼ぶ人もいますけれども、これは国立の文部省の大学共同利用機関と呼ばれている所であります。

大学共同利用機関なんていうのもよく知らないという方がひょっとしていらっしゃるでしょうか？大学共同利用機関というのは、この近辺では、民博（国立民族学博物館）とか日文研（国際日本文化研究センター）とか、そういった、大学が共同して利用できる国立の機関でして、その内の一つにメディア教育開発センターがあります。

メディア教育開発センターは、「高等教育におけるマルチメディアの利用を促進するための中核的機関（大学共同利用機関）として、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等の研究及び開発並びにその成果の提供」を目的としています。メディア教育開発センターというと、ときどき教材開発センターという形で間違えられたりもするんですけれども、また、メディア教育というと本当は小学校とか中学校の方が効果的なのもかもしれませんけれども、高等教育というのが1つの枠組みとして与えられております。これは、元々は放送教育開発センターと呼ばれていたものが、平成9年度に改組されて、放送がメディアに変わったわけですが、敷地は幕張にありますけれども、その同じキャンパスの中に並んで放送大学というのがありまして、放送教育開発センターは、放送大学を準備するに当たって設立された大学共同利用機関という位置づけがなされていまして。放送大学っていうのを御存じない方がいらっしゃると、さらに困ってしまいますが、ときどきNHKの技術者養成大学みたいなことを言われる方がいらっしゃいますが、放送を利用した、普通の、正規の大学です。実際は、放送教育開発センターは、放送大学が全国化すれば一緒になるとかそういう話もあったのですが、現在、皆さんが肌で感じておられると思いますけれども、インターネットをはじめとする新しいメディアが急速に発展してきて、それらを大学の教育に適切に利用することに関して、いろいろな問題が浮かび上がってきました。そこで、「放送」というのを一般の「メディア」に置き換えて、メディ

メディア教育開発センターという形で平成9年度に改組されたわけです。放送大学を準備するということで、メディア教育開発センターを所轄する部局は、文部省の高等教育局に置かれてきています。そういうことで、高等教育という1つの枠組みが、メディア教育開発センターには与えられておりまして、そこで大学の教育の中でいろいろなメディアを使って、授業方法等を改善していく試みに取り組んできているということです。

NIMEの4事業

メディア教育開発センターでは、ここに書いてあります4つの事業を、現在やっております。

1つはSCSという…。SCSは知っている方はいますか？結構いらっしゃいますね、28人位でしょうか。ありがとうございます。

SCSといいますのは、スペース・コラボレーション・システム Space Collaboration Systemと呼ばれておりまして、通信衛星を利用して大学間が双方向で結ぶシステムです。大学間といいましても、基本的にはいくつかの大学が結べます。30か所くらいの大学を結ぶこともときどきあります。京都大学にも3か所、VSAT局と呼ばれるSCSの画像・音声を送受信できる「SCSサイト」があります。国立大学を中心に、全国の大学にかなり入ってきておりますけれども、メディア教育開発センターには、それをコントロールする、いわゆるハブ局と呼ばれるものが置かれていまして、そのSCSを推進するのが現在のセンターの1つの目玉となっているわけです。

次に、放送教育開発センターの時代から、放送大学の放送授業を作っております、その一環で、放送やビデオ、最近では、DVDなど、私もよくわからないようなメディアもいくつか出てきておりまして、そういったメディアに載る教材を作っていくというメディア教材制作事業があります。

それから、データベース事業といいますのは、一般のデータベースとちょっと違った特徴がありまして、いわゆる映像データベースというのが中心に構成されています。その映像データベースを活用していただいたり、また、著作権に関わるホームページなども整備しつつあります。

そして4番目にありますのが、今日お話しする研修ということになります。

この4つの事業はいずれも、メディア教育開発センターの研究開発部の研究開発に支えられているのが特徴になっています。研究開発部の中には、例えば教育ネットワーク研究開発系という研究開発系がありまして、そこではSCSやネットワークに関連する研究開発をしております。学習リソース研究開発系は、メディア教材制作とかデータベース事業、それから、私はメディア活用研究開発系という所にありますけれども、そこで研修を企画したり研究開発しています。

NIMEの研修事業

その研修事業ですけれども、研修事業がどういう形で最初企画されたかということですが、メディア教育開発センターと「メディア」がついている機関でもありますので、純粋にファカルティ・ディベロップメント（FD）だけを前面に出して研修を行うわけにもいきませんで、「メディアを活用」しながらというのが、研修事業の1つのポイントになっています。実際に、メディアを活用したプレゼンテーション技法の研修とか、ビデオ教材の制作のコースであるとかいったメディア活用に関わるコースと、それからこれからお話しする授業改善のコースなどから、研修の講座が構成されています。平成9年度から、メディア教育開発センターで新たに研修事業が始められて、ちょうど3年間経てきたことになります。

この部屋の入り口の所にも、私どもが毎年大学に配付しております「応援しますあなたのファカルティ・ディベロップメント」というビラがありますので、今年度のもので終わったものばかりですけれども、また来年度のものはこれから皆さんの大学にもお配りすることになっておりますけれども、こんなことをやっているという参考のために置いておきましたので、後で手にとって御覧いただければと思います。

この研修の全容につきましては、実は、このFD研修事業を作った、今、真ん中あたりにお座りの名古屋大学の池田輝政先生がよくご存じでして、そういう意味ではちょっと私が説明しにくい所もあります。それから、先ほど新潟大学の報告の中にも、ほとんど全部の研修に出る方がいらっしゃるということですが、NIME主催の研修にも、そこにいらっしゃる、東京医科歯科大学の片野尚子さんは、ほとんどの研修を経験してくださっている方で、むしろ私よ

りも片野さんの方が、NIMEの研修についてはよくご存じかと思います。そういうことで、私は分相応に、私が実際に担当しております「大学授業の自己改善法」という研修プログラムについてお話を進めていきたいと思います。

Ⅱ 研修シリーズ『大学授業の自己改善法』の考え方

研修講座「大学授業の自己改善法」の研究開発的原点

放送教育開発センター時代には、研修事業をやるということは、我々自身は意識していなかったのですが、メディア教育開発センターに改組するに当たって、何か事業的なものやっていくということで改組が認められた部分がありまして、その1つに「研修」という事業が我々に課せられました。しかし、大学の先生を相手に「研修」ということ自体が成り立つんだらうかという懐疑の方が我々の正直な感覚でありまして、私はメディア教育開発センターは「研修」事業をやらない方がいいという意見をもっていた1人です。因果なことに、その私が研修事業の企画会議というものに参画することになりまして、何か研修を企画しなければいけないという立場になったんです。

そこで、何をしようかといろいろと考えたわけですが、私たち自身が研修を推進していくためには、やはり、私たち自身が行ってきっていた研究開発に基づいていく以外ありません。その1つが、放送教育開発センター時代にやっていた研究開発で「メディア利用による大学授業の改善」という、これは同僚の伊藤秀子教授が主査として行なっていた研究プロジェクトがありまして、そこでは、いろいろな大学で、パワーポイントだとかOHPのレベルもあるでしょうし、さまざまなメディアを使って授業の工夫が積み重ねられており、それがどういう効果をもっているかということを検討する共同研究を行っていました。そのような先生方の授業の工夫を持ち寄りまして、合評会をやりながら情報交換をするという試みが、非常に活気のある研究会になったということでした。いわゆる初・中等の先生は、そういう授業研究会をしばしばやっておられるだろうと思いますけれども、そういうことを大学の先生が面白がってくれるかどうか、来てくれるかどうかという部分もありましたけれど、そういう経験があったということを知りまして、そんな会を開くというのも1つのアイデアかとまずは思いついたわけです。

それから、私自身がやっていたのは、次にあります教授学習評価支援システムの開発ということであります。放送教育開発センター時代は、放送大学の番組を作ったり、いろいろな放送教材を作ったり、その際にやはりさまざまな工夫を試みてきているわけですが、それがどういう効果をもっているかといった評価やモニター調査がバラバラにやられていて、そのために比較が難しかったり、何よりも、そのために放送教材制作のノウハウの積み重ねが、少なくとも研究開発的にはできていないという思いがあったわけです。それを打破していくためには、やはり放送教育開発センターの統一した評価調査を作っていかなければいけないのではないかという発想がありまして、しかし、教材の目的によっては質問項目も違ってくるということもあるだろうということで、白紙のマークシートを作りまして、そこにレーザープリンターで自由に質問項目を印刷できるシステムを作りました。それで、マークシート方式のモニター調査で回答してもらったものをOMRで読み込んで、そのデータを処理して、簡単な結果をフィードバックできる、「教授学習評価支援システム」と呼ばれるコンピュータ・システムを開発したわけです。質問項目を自由に選べて、しかも結果が一応コンピュータのデータベースの中に蓄積していけるというメリットをもっています。

これは、山口大学でも新潟大学でも試みられていた「学生による授業評価調査」にも活用できます。「学生による授業評価調査」というのは、一律のフォームで行われるような場合には、教員の人事管理に使われるのではないかと先生方のディフェンシヴな心配が生じます。その点、アメリカのイリノイ大学などでは、私が実際に在外研究で見聞してきたことですけれども、授業評価に関する項目バンクがあって、そこから授業の特徴に応じて項目が選べて、先生ごとに個別の授業評価が行われています。それであれば、先生1人1人が、自分の授業を改善していくために必要な項目をデータベースから選べますので、授業改善により結び付いた授業評価のシステムになり得るという印象がありました。それで、それを何とか、大学授業の改善に関わる研修の中に組み込んでいけそうだというのが、もう1つの研究開発的土台となりました。

自ら積極的に参加する研修の構築

放送教育開発センター時代に「放送利用の大学公開講座」という研究開発事業をやっておりました。これは、平成10年度に終了したんですけれども、放送大学が全国化するいわば準備のための実験研究開発と位置づけられていまし

た。そこでは、大学の先生方に、放送を使った教材を、しかも、一般の人々にわかりやすい教材を作っていただかねばならなかったわけです。それは、ある意味では、大学の先生方には、余計な業務が降ってきて大変なだけだったのではないかという部分もあったんですが、その総括シンポジウムの中で、その活動を通して、先生方にとっては、いわゆるファカルティ・ディベロップメント（FD）として非常に意味があったという総括があったんです。「放送利用の大学公開講座」のプロジェクト自体は、FDというのを全然意識していなかったんですけれども、つまり、講義形式の情報伝達の間というよりも、自分自身で教材を作成するような試みを入れた方が自分自身に返ってくるものも多く、結果的に、自己開発につながっていくという総括が得られたということがあります。これは、研修事業の構成にも重要なヒントを与えてくれます。

それを裏付けてくれるのが、「Learning Pyramid」という象徴的な図式です。これは、私がイリノイ大学に在外研究で行った時の受け入れ教官のデルウィン・ハーニッシュ Delwyn Harnisch 先生が教えてくれたものですが、いろいろなところで参照されているのを最近よく見かけています。こちらに5%、10%というパーセンテージが書いてありますけれども、このパーセンテージは、左側の教授方法で与えられた情報の何パーセントくらいが学習者に保持されるかという、研究的というよりも1つの象徴的な数字だとお考えください。つまり、レクチャー Lecture、今、私がお話ししているのもそうですが、こういった形で情報を伝える時の情報は、その5%だけが、学習者に残っていくということです。つまり95%は忘れていくということです。本を読む Reading と少し上がって10%となります。パワーポイントなんかでよいプレゼン Presentation ができると20%ぐらいに保持率が上がります。実演 Demonstration などですと、もう少しその保持が良くなります。ディスカッション Discussion を導入すると、学習者自身が参加していくことになりまして50%位に保持が上がってきます。それから、実際に学習者がやってみること、Learning by Doing です、そうなりますと75%になります。最も保持が高いのは、ティーチング Teaching です。学習者が自分自身で教える機会が得られれば90%になります。教えることができても100%は残らないというのは、これは説明するまでもなく、皆さんがふだん経験していることだと思います。このような階層的図式を、Learning Pyramid と呼ぶんだそうです。

◇ Learning Pyramid

Lecture	5 %
Reading	10 %
Presentation	20 %
Demonstration	30 %
Discussion	50 %
Learning by Doing	75 %
Teaching	90 %

「研修会」などと言いますと、普通は、レクチャーであり、リーディングでありと、そういうふうにイメージされるのではないかと思います。より効果的な研修にするためには、何とか、Learning by Doing とか、ティーチングとか、保持率の高い方にもっていけないかということが、「大学授業の自己改善法」の研修の構成の発想の原点にもなっています。つまり、講演会による研修ということよりも、自ら活動するような研修を組めないかということです。そこで、自らふだんの日常生活で自分の授業を工夫して実践し、そしてここに「教授学習評価支援システム」が入ってくるんですけれども、その授業を自ら評価して、それに基づいてさらに授業を改善していくという活動を皆さんにやっていただくといいですか、そういう自らが授業改善に取り組むことのできる場をしかけるということを考えたわけです。折からいろいろな大学でも、「学生による授業評価調査」がブーム的に急速に広まり始めたということもありまして、授業評価と授業改善を組み合わせる研修が時宜的にもニーズが得られるだろうということもありました。ただ、授業評価は管理的に使われてしまうと拒否反応の方が強くなってしまいますので、私どもは、敢えて「自己改善」の「自己」を強調するようなプログラムを組んでみたわけです。そうしてでき上がったのが、「大学授業の自己改善法」という研修講座というわけでありました。

Ⅲ 研修シリーズ『大学授業の自己改善法』の概要

「大学授業の自己改善法」の実際

「大学授業の自己改善法」は、平成9年度から3年間続けてきております。

平成9年度は、合同説明会、通信研修、合同報告会という3つの研修機会全体で1つの研修講座として構成してみました。自ら実践するという意味では、「通信研修」が最初の目論見ではそのメインになるべき部分でして、「教授学習評価支援システム」による授業評価の実践と、それに関わる情報のやりとりを、日常的に行っていただくというものです。「通信研修」というと、最近では、電子メールやインターネットによる通信などを連想される方も多いかと思いますが、今のところ、「教授学習評価支援システム」を利用するために、マークシート方式の評価調査を郵便でやりとりする「通信」でありまして、マークシートを郵便で送り、そして調査を実施して郵便で送り返してもらい、その結果をまた郵便でフィードバックするということです。一部の受講生の方には、「通信」の意味で、ちょっと誤解を招いたりもしたんですけれども、いずれにしても、ここが、受講生自らによる授業評価の実践を引き出すきっかけになっていたわけです。

この通信研修を軸にいたしまして、最初に、研修の進め方や授業評価、授業改善等のヒントを提供するために合同説明会を行いました。この時に、田中先生には講師に来ていただいたんですけれども、シンポジウム形式で、こんな感じで授業評価を使ったらいいよとか、こういう方法で授業評価や授業の工夫を試みたらいいよといった話題提供と質疑を行いました。田中先生の「何でも帳」とか、その時来ていただいたもうお1人の三重大学の織田輝準先生の大福帳などの試みは、それが直接のきっかけというわけでもありませんが、ジワジワと全国に浸透していった感もあります。そういう「レクチャー」の機会も入れながら、つまり、そのレクチャーで保持された「わずかな」情報をそれなりに自分たちの活動に位置づけていただきながら、通信研修で授業評価データも収集していただいた上で、最後に自分たちの授業でこんなことをやってこんな評価が得られたよという事例を報告する、いわゆる授業研究会のようなものを、「合同報告会」として最後に組織いたしました。この年は、これらを一貫して受講していただくことが研修の趣旨にかなっていることだろうということで、すべてを受講していただくことを原則といたしました。しかし、こういうアイデアを出したら、最初の内は事務の方々から、「あれは研修とは違うと思います」とか言われたりもしましたが、それを研修事業の主査であった池田先生が「好きなようにやりなさい」とかばってくださって、今ではメディア教育開発センターでもそれなりの位置を築いてきつつあるのではないかと思います。

半年にわたる、合同説明会から最後の授業研究会まで継続される受講生が2、30人でしたが、受講する側からいたしますと、なかなか半年継続して続けることが難しいということも少なくありませんし、また、例えば、自分の大学で授業評価はやっているので授業研究会だけ出たいとかいう人もいるだろうということで、2年目は、シンポジウム、通信研修、合同報告会などを独立で受講できる形にしました。どの講座も必要に応じて自由に受講できるようにしたわけです。

それから、最初にいきなりシンポジウムをやって、最後に授業研究会となりますと、間があいてしまいますので、その間、具体的にどのように授業改善を試みたらいいのかという情報提供も各論的に取り入れてみようということで、新たに入れたのが「SCS利用の研修」です。「授業評価と授業改善」と銘打って、7回にわたってさまざまな先生に講義をしていただきました。

「SCS研修」では、こういうFDの研修会では講師として常連になられています北海道大学医学部の阿部和厚先生にお願いしたり、それから我々の領域の教育関係の先生、留学生関係の先生とか、いろいろな先生に講師をお願いしたんですが、そうすると話題が散漫になってしまうということも要望として出て参りました。そこで、3年目の今年度は、いくつかのテーマごとに数回ずつのシリーズでSCS利用の研修を構成するようにいたしました。「自分の授業をどう捉えるか」は授業評価に関わる諸手法をテーマにしたものですし、また、それから医学・看護学の領域での授業改善については、非常に人気があるというかニーズが高かったので、それだけをまとめてやってみようということになりました。それから、「授業研究」ですが、これは藤岡先生にも協力していただきました。そういったような形で、SCS研修の講座を少し細分化しましたのが今年の特徴です。

それから、「医学・看護学」に関するSCS研修で、電子掲示板、すなわち、インターネットを通じていろいろなディスカッションをやるという試みですが、それを初めてやってみました。そのディスカッション・ボードは、SCS研修

の期間の3か月間だけのものでしたが、非常に熱心な討議がわき起こりまして、その3か月の間に約400字詰めにして多分500枚位になるような文書がたまりました。これを出版してほしいと出版社に掛け合っただけですが、簡単に断られてしまいましたが、実に中味の濃い、熱い討議が行われまして、これはなかなか私自身も面白く参加させていただきました。

それから、シンポジウムを今年度は、初めてではなく3月に、授業研究会の前日に組んでみました。今週終わったばかりですが、シンポジウムに授業研究会と組み合わせれば、ちょっとした学会の雰囲気になります。シンポジウムは、「かわる学生・かわる大学」というテーマで、いわゆる学力低下の問題を扱いました。私は、初めて知ったんですけども、「2006年問題」というのが、大学人にとっては2000年問題以上に大きな問題として控えているそうです。2006年に、学習指導要領が変わって初めての学生が大学に入ってくるそうでして、学力低下に類する問題がさらに深刻になるのかどうか、その辺はよくわかりませんが、そうした急速に変わりつつある大学、学生を知り、そこでどんな対処を我々がしていくべきなのかというシンポジウムを企画したわけです。それから一昨日、シンポジウムの翌日に、田中先生にも講師においで頂きまして、授業研究会をやりました。

シンポジウムと授業研究会を連続させて、ちょっとした学会風にアレンジしたわけですが、大学の先生方はどこかの学会に属していられちゃいますし、こういうFDもそういった意味で、FD研修会に参加した成果を、学会的な業績として申告できれば、少しは参加者のインセンティブになるかなとも思ひまして試みてみました。

今年度は最初にやった、SCS研修では全国で150人くらいの参加の方がありました。25サイトぐらいでしたが、北海道から九州まで全国的な先生方が集まって聞いてくださいました。まだまだ内容的にはこれからの部分もありまして、3回のシリーズでしたが、150が130になり130が100になると、まだ受講人数を増やしていくだけの力はないようで、その辺はまだ今後の課題です。

さらに、平成12年度の予定です。1つ新しい試みとして考えているのは、今日、こういったシンポジウムにこれだけの方がお集まりになるということもありますし、FD運営に関するワークショップを企画しています。これは岡山大学のFD委員会の先生方をお願いしているところですが、こういったようなものを新たに企画していこうと考えているところです。

◆『大学授業の自己改善法』（平成9年度）

◇あなたの授業を自分で見直しませんか！—— 授業の自己評価法・改善法を探る ——

「大学改革」が叫ばれています。大学の先生方の身近にも、授業を見直そうという動きが迫ってきています。その一環として、「学生による授業評価」などが導入される大学も急速に増えています。しかし、その「授業評価」をどう利用したらいいのか、どう授業を改善していったらいいのかということは、案外に見えていません。逆に、「授業評価」は単に教員管理に利用されるのではないかと、といった疑心暗鬼を生み出したりもしています。でも、現代の時流にかかわらず、大学の授業を自分自身の納得のいくものに改善していくことは、大学教員の変わらない基本的な心構えに違いありません。そこで、この研修コースでは、大学で授業をもたれている先生方に、ご自分の授業をご自身で改善していくためのヒントと技法を提供させていただこうと考えております。

◇概 要 （基本的に以下の3つの課程を経ることを要請）

- ・合同説明会：平成9年10月3日（金） 研修の説明&シンポジウム
- ・通信研修：平成9年度後期 教授・学習評価支援システムの利用等による授業評価実践
- ・合同報告会：平成10年3月20日（金） 評価情報に基づいた授業研究報告会

◆『大学授業の自己改善法 '98』（平成10年度）

◇SCS研修の導入

◇評価支援システムの高度利用（毎回授業評価調査への対応）

◇概 要 （独立受講制へ）

- ・講座A（シンポジウム・大学の授業評価を考える）：平成10年8月25日（火）
- ・講座B（通信研修・学生による授業評価実践）：平成10年度後期

- ・講座C（通信研修・教授学習評価支援システムの高度利用）：平成10年度後期～
- ・講座D（SCS利用研修・授業評価と授業改善）：平成10年9月～平成11年1月
- ・講座E（集合研修・自分の授業を振り返る）：平成10年3月25日（木）

◆『大学授業の自己改善法'99』（平成11年度）

◇SCS研修の拡充（テーマ別シリーズ）

◇概要

- ・SCS利用研修（自分の授業をどう捉えるか—授業評価に関わる諸手法）：平成11年9月
- ・SCS利用研修＋電子掲示板（医学・看護学における参加型授業の工夫）：平成11年10月～平成12年1月
- ・SCS利用研修（授業研究・教授法）：平成11年11月～平成12年1月
- ・通信研修（学生による授業評価実践）：随時
- ・シンポジウム（かわる学生・かわる大学—学習支援の実践と課題）：平成12年3月22日（水）
- ・授業研究（自分の授業を振り返る）：平成12年3月23日（木）

◆『大学授業の自己改善法2000』（平成12年度・予定）

◇FD運営に関するワークショップの企画

◇通信研修の分割

◇概要

- ・シンポジウム『かわる学生・かわる大学—FDの効果と大学の開放』
- ・研究会『授業研究：自分の授業を振り返る』
- ・ワークショップ『FD運営：授業改善に結び付けるために』
- ・通信研修（個人向け）『学生による授業評価と授業改善実践』
- ・通信研修（組織向け）『授業評価調査』
- ・SCS利用研修『自分の授業をどう捉えるか—授業評価に関わる諸手法』

Ⅳ 共同体を作ることの意味—研修活動から得られたもの

「大学授業の自己改善法」から得られたもの

ここまで15分で話そうと思っていたんですけども、25分かかってしまいました。私の話はどれも長くなりまして…。授業評価でも指摘されたりもしまして、わかっていることではあるんですが、なかなか改善されません。説明の足りない点なども多々残されると思いますので、御質問等賜りまして、その辺は質疑応答の中で補足させていただきたいと思いますが、私の話のまとめといたしまして、こういった研修で何を得たかということを簡単に説明させていただきます。つまり、この研修で、実際に授業が変わったかということですね。「授業が変わったか？」というと、少なくとも私自身も、この研修のある意味で講師側の立場にいながら、この話が長くなってしまっていることに代表されるように、なかなか改善は難しいというのが正直なところだと思います。授業を変えようとしているという意識が育ちつつあることだけは確かですが、それが、いわゆる授業の改善に結び付いたかどうかは、受講生全般にわたってみても、まだ未知数と言った方がいいのではないかと思います。

私がこのFDに3年間取り組んで一番感じていますことは、人的なネットワークの広がりが見られているということです。その意味では、この3年間のFD研修を実施してきて、一番恩恵を被ったのは私自身ではないかと思います。講師の先生は元より、受講生の先生方とも貴重なネットワークができました。私だけでなく、講師の先生方も、受講生の方々の間にも、いろいろなネットワークができています。講師の先生が他の大学にFD研修の講師として呼ばれたきっかけにもなりましたし、また、受講生が、講師の先生の大学での実際の講義を参観に行かれたりということもあるようです。そういったネットワークの広がり、「大学授業の自己改善法」という研修の一番の財産ではないかと思っているわけです。

そういう意味で、最近心理学の方で言われている「正統的周辺参加論 Legitimate Peripheral Participation」と

いう、これを説明しているとまた長くなってしまうんですけども、要するに、あるコミュニティに参画し、その中心的立場に位置づけられていくこと自体を学習と捉える新しい学習観がございまして、その視点からFDを捉えられないかということを感じているところです。

FDに参加する教員同士がネットワークを作り、そこでのコミュニケーションを密にしていくこと、それによって自己開発を進めていくことができるということ、そういうコミュニティ作りということが、まさにFDそのものになっていくのではないかと思うわけです。

そういう見方をしますと、「授業評価」などの意味合いも違ってくるのではないかと思います。最初は、自己開発のための授業評価という位置づけをしていたんですけども、授業改善をやろうとすると自分だけではできないことに気づかされることが少なくありません。典型的な例としては、授業評価では必ず「授業が難しい」という反応が学生から来ます。それではということで、内容を減らしていくという対処をいたします。しかし、内容を減らしていくと、その減らした部分をどこでどう補填すればいいかという問題が出てきます。それを1つの授業の中で、自分だけでやろうとしても、当然無理が出てくるわけで、ではカリキュラムをどうしようとか、そこはこちらの授業で分担するとか、演習を併行して組み込もうとかといった、学科や講座レベルでのコミュニケーションが大切になってきます。つまり、1つのコミュニティの中での意思の疎通が重要になるということです。そんな議論を行う際の共通の素材として、「授業評価」というのは新たな意味が出てきます。例えば、授業評価の「わかりやすかったと」という項目の「クラス平均値が3点だったからまあまあだね」とか、「2.5より下がっちゃったから、これは何とかしないといけないよ」といったことが、そのコミュニティにおける共通の言葉として使えるようになります。そういう共通言語があれば、1つの学科の中でのカリキュラム改善の動きにも、より結び付き易くなるのではないかなというように見方ができるようになりました。

このように、授業改善にいき取り組むことを考えますと、その授業だけを切り離して取り出して、どうすれば改善できるかというようなことだけでは済まされない事柄がいっぱい生じてきます。わかってはいるけどできない忙しさは、大学人である皆さんが共通して抱えているわけで、1人だけで改善の努力をその上にしていかなければならないのはとても大変なことです。そこで、我々が大学人として生活をし、その中で授業の準備をし、授業をし、そしてフィードバックをもらい、そして研修の場に臨み、仲間と飲み、語り合い、いろいろなヒントをもらって授業の準備をし、工夫をし、また、お互いに割り振りをすることである部分を授業から切り捨てるなどして、次の授業を組み立てていくというような流れができてくれれば、自然に授業というものもいい方向に改善されていくのではないかと思います。そんな意味で、コミュニティの形成ということが、自ら参画する研修を私自身が実施してきた中で、体験できてきているということはある種の含蓄を感じさせることではないかと思います。FDを企画し、実施しながら、FDの中で私たち自身、相当にもがいている部分もあるわけですけども、この研修をやりながら私自身が一番学ばせてもらってきていますとともに、そんなコミュニティが私自身の周りにでき始めている感覚がもてるようになってきていることが、3年間を終わっての私自身の充実感にもなっていますし、一番初めに田中先生がおっしゃった「元気」という部分にもつながっているのだらうと感じているところです。